

同和問題と差別について
高知県立宿毛工業高等学校一年 高見悠希
残念なことに今の社会では、様々な人権問題が未解決のまま存在している。その数ある人権問題の中でも、私は同和問題について無意識に考えることが多々ある。なぜなら、中学校の頃の授業で同和問題について理解を深める機会が頻繁にあり、学んだことが強く印象に残ったからである。
私は中学校に入学して間もない時に、人権に関するアンケートを受けた。そして数多の質問の中に「部落差別について知っていますか」というものがあった。正直何のことが分からないうし、全く知らなかった。当時は女性の人権や立場に関することで、女性の方が不当な扱いを受ける女性差別や、民族や文化、肌の色のちがいに対する偏見から生まれる人種差別などについては、詳しくなくても聞いたことくらいはあった。しかし、部落差別は聞いたことすらなかった。後に、生まれた地

域や集落によって社会の中で不当な扱いをし、差別することが部落差別だと知った。意味が分からなかった。部落差別は、特定の地域で生まれた者に対して差別をするというもので、地域の違いという説明だけでは理解できても、納得することができなかった。学習を深めていくうちに、昔にあった身分制度が関係していることを知った。

また、中世から近世にかけて幕府などが、それまでにあった偏見等を利用して排除してきたものだと言った。その差別されていた人たちが住んできた地域が被差別部落とされ、そこに住んでいるだけで今も差別されることがあると知った。虫唾が走った。そんなにも訳の分からない理由で、今も差別を受けている人がいるということに驚いた。

学習を深めていく中で、実際に差別を体験した人から話を聞くこともあった。涙を流しながらも自分の過去を語ってくれる人もいて、聞いていて、部落差別の残酷さが強く伝

わってきた。体験談を語ってくれることもあって、自分の中でも印象に残ったことがある。様々な場面で自分の出身地を言うのが、とても怖くて恐ろしかったということがとても印象に残り、私はこの事実を多くの人に知ってもらわなければならない。

部落差別でも実際にどのような差別を受けたか説明を受けて、とても印象に残ったことは、結婚に関する差別だ。実際に差別を受けた人は自殺で死んでしまったと聞いた。優しくかった交際相手の両親は、出身地を言った瞬間に態度が急変し、結婚を反対するようになった。そして交際相手のおなかの中に子どもがいたそうだが、それも結婚を反対する両親に勧められ、中絶してしまったそうだ。私は部落差別を甘く見ていた。このような経験談を聞くまでは、学校の授業で部落差別について学び、あってはならないことだと思う反面、中学に入学するまでは聞いたことのな

い 人権問題で、規模も小さく被害も大きくな
い のだろうと考えていた。しかし、そのよう
な 考えは、経験者から伝えられた事実を聞い
て 粉碎された。たくさんの人が差別を語るう
え で涙し、結婚差別の事例に関しては、被害
者 が死んでその場にいないという事実には衝撃
を 受けた。このようなことが全国で今も起き
て いるという事実には、筆舌に尽くし難い気持
ち になった。そして話してもらったことは全
国 で起きている部落差別の一部にすぎないと
い うことを、忘れてはいけないと考えた。
部 落差別に限らず、全ての差別は間違った
先 入観と偏見によつて生じるものだと思う。
だ からこそ、正しい知識を身に付けることが
重 要であり、同和問題だけでなく、全ての人
権 問題にとって必要なことであると思う。無
知 であることは危険なのだ。私は、中学に入
学 するまで同和問題という言葉聞いたこと
が なかった。だから私は無知であつたし、無
知 であつたからこそ、部落差別について話を

聞く中で衝撃を受けることが多かった。つまり私は、無知であつたからこそ差別に対する先入観と偏見がなかったと言える。この世の全ての人が、差別の概念を知らなければ、差別は起こらないし、差別という言葉は存在しないと思う。しかし、差別は現在の世の中に存在している。だから、差別をなくすために、できるだけ多くの人に正しい知識を身に付け、差別について知ってもらいたい。そして、誰も差別を知らない世の中が訪れることを私は願っている。